

想 —ソウ—

a2200616 齋藤 彩

■制作意図■

幼いころから、気がつくと向かう先には自然が溢れていました。どこへ行こうとも、足もとに咲いている小さい花であったり、大きい樹であったり、小さな音を立てて流れる川であったり。いつしかその自然という形は、私になくはならない存在となり、自分の気持ちにを自然に重ね、様々な表現を繰り返してきました。

この短大に入学してから漆を学び、その過程の中でいくつかの漆芸作品を目にしてきました。作品を見ていく中で、自分も漆芸で自分だけの表現を試みたいと強く感じ、そしてまた今まで自分に溢れていた気持ちを自然という形で表現したいと感じました。漆芸には多くの技法が存在し、その組み合わせで様々な表現が可能だということを学びました。その上で、自分の表現したい自然のモチーフと合わせ、ひとつのパネル作品を作りたいという気持ちのもとで、制作しました。

■デザイン■

- ・大きさは縦90センチ横120センチとした。
- ・自分の成長とともに身近にあった自然をモチーフとすること。
- ・パネルという画面の上で、目に見える立体感をつけること。→樹の幹、水面など
- ・加飾には銀・貝・卵といった材料を使って表現にあわせた技法を用いる。

■制作工程■

1. 木地の切断、木地調整
2. 木固め
3. 布着せ→両面
4. 布目揃え
5. 布目摺り→両面
6. 表面下地（荒）
7. 下地研ぎ
8. 表面下地（細）
9. 下地研ぎ
10. 表面錆付け、錆研ぎ
11. 表面錆付け（二回目）、錆研ぎ
12. 表面錆付け（三回目）、錆研ぎ
13. 表面錆固め
14. 下塗り（黒呂色）、下塗り研ぎ
15. 追い錆、追い錆研ぎ
16. 中塗り（黒呂色）、中塗り研ぎ
17. 追い錆（二回目）、追い錆研ぎ
18. 上塗り、上塗り研ぎ
19. 置目とり
20. 加飾
 - ・卵殻、螺鈿
 - ・研ぎ出し蒔絵
 - ・金箔
21. 加飾固め
22. 上塗り（黒呂色）、研ぎ出し
23. 胴摺り、呂色磨き→研ぎ出し部分
24. 加飾
 - ・錆
 - ・平蒔絵
25. 完成



布着せ

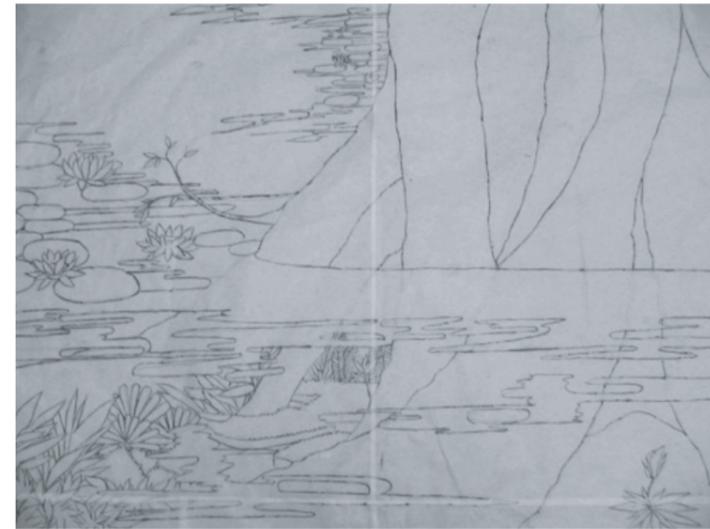


錆付け



置目とめ

加飾（卵殻・螺鈿）



置目紙

上塗り後のパネル



■考察・感想■

「漆にふれてみたい」そう感じたことが、クラフトゼミに所属することを決めた動機でした。実際に直にふれ、かぶれに負けそうになりながらも造りあげることがどんなに大変であり、そして大切なのかを改めて感じることができました。作品ひとつひとつに想いを込め、造り出されたモノひとつひとつに大切な気持ちがこもっていること。そのことを学べた二年間でした。

作品を制作するにあたり、県展作品同様パネルで挑んだものの、やはり簡単にはいかないということを感じさせられました。下絵デザインに対しても頭で描いていたイメージを実際に書き出し、その合った表現を探すことに苦労したり、パネル板の制作には大きい画面だからこそ下地を塗っていくことでさえ重労働に感じました。勿論平らになるように制作することは困難で、ひとつ前の工程が次の工程にひびいてくる慎重な作業の連続でした。途中には気持ちに整理がつかず手を止めてしまうこともありましたが、一生悔いのない作品に仕上げたいという想いが強く、作業を続けることが出来たように思えます。そしてひとつひとつ工程を進めていくと出来上がっていく嬉しさがこみ上げ、これだと思ふ加飾を選択し試してみると、加飾の表現を考えれば考えるほど奥が深く、幅広い技法であると改めて感じました。

ひとつのものを造り上げる充実感は、私が漆を通して学んだ「モノにづくりにこもった気持ち」をしっかりと感じる事が出来たように思えます。漆はそのことだけではなく、漆があったからこそ知り合えた人や、出会った出来事、見てきたもの、感じたものが自分の中で一生モノになったと感じています。作品も含め、何よりそのことが私には素晴らしい経験になったと思います。

漆芸作品は高価で、自分には一生手の届かない遠い存在に思えていましたが、この二年間という短い間に漆がこんなにも身近であたたかく、やさしいものであることを学ぶことが出来ました。今後漆を用いた制作を行う機会が少なくなってしまうとしても、この気持ちを忘れずに、そして大切にしていきたいと思います。